



眠りつづける少女たち
—脳神経科医は〈謎の病〉を
調査する旅に出た—

スザンヌ・オサリバン 著
高橋 洋 訳
紀伊國屋書店
2023年4月 432頁
本体価格 2,500円＋税

本書は、アイルランド出身で英国の脳神経科医である著者が世界各地の原因不明の病に苦しむ人々を訪ね、その背後にある文化的・社会的要因を探求したノンフィクションである。評者は本書のタイトルを書店で目にした際、原因不明の謎の病について著者が名探偵よろしく新規の神経学的病態を解明することを想像して心を躍らせて購入したものの、読み始めて間もなく、その中心的なテーマは、ある集団に生じる心因性疾患、特に機能性神経障害（DSM-5では、機能性神経症状症）であることがわかり拍子抜けしたものである。機能性神経障害は従来の転換性障害、いわゆるヒステリーであり、評者にとってありふれたものだったからである。しかし、その印象は本書を読み進むにつれてよい意味で裏切られることになった。著者は各地の奇妙な病の成り立ちを検討する際に単に個人の要因を探るのではなく、集団としてのそれを歴史的・文化的・社会的あるいは政治的背景から読み解こうとしていたからである。そのようなアプローチによって、機能性神経障害は無色の疾患分類名から脱出して、にわかに鮮やかで重層的な色彩を帯び、患者たちが発する無言の物語を描き出すことに成功しており、それが評者にとって新鮮な驚きであった。

本書は各章ごとに異なる症例を取り上げ、それぞれの背景や要因を詳細に分析するという構成である。特筆すべきは、世界各地の奇妙な現象に対して、著者は現地に直接赴き、当事者や家族、医療関係者、行政職員らから丹念に話を聞いていることである。冒頭ではスウェーデンの移民家庭の少女たちが突然意識を失い、長期間「眠り続ける」ようになった「あきらめ症候群」が登場する。その後も、ニ

カラグアに現存する幻視や憑依を主症状とする「グリシクニス」、カザフスタンの鉱山町で突如集団的に発生した「眠り病」、キューバに駐在するアメリカやカナダの外交官たちに流行した、頭痛・聴覚異常・認知障害などの症状を呈する「ハバナ症候群」、コロンビアでHPVワクチン接種後の女子学生たちに集団発生した「解離性発作」、アメリカ北東部ル・ロイや南米ガイアナで起こった「集団心因性疾患」と続く。これらはいずれも、単なる個人の脳や身体の異常だけでは説明しきれない現象であり、集団における心理的・社会的・文化的・政治的要因あるいはメディアの影響が複雑に絡み合っている。

オリヴァー・サックスの後継者としても注目される著者であるが、サックスは、『妻を帽子とまちがえた男』や『レナードの朝』などの著作を通じて、「個」の経験世界を掘り下げ、神経症状の背後にある人間ドラマに光をあてたのに対し、オサリバンは「集団」としての現象に着目し、社会全体が病の発症や拡大に果たす役割を描き出す。オサリバンは世界各地の「謎の病」をめぐる旅を通じて、安易に診断シラベリングすることに警鐘を鳴らしている。つまり、過度な医療化による過敏な診断基準と過剰診断は、負の側面として人々に病者であるというアイデンティティを付加することでセルフスティグマを増長し、社会全体の成長を阻害しているかもしれないこと、また、「病」という表現型は集団における苦悩のメタファーであり、無理に過度の医療化を適用するとコミュニティの正常な恒常性を破壊するかもしれないことに強い懸念を示している。また、本書で扱った事例の多くで、属するコミュニティの危機を症状という形で警告を発する役割を担ったのが少女である点も興味深い。

日本ではコロナ禍前後から10歳代女性の自殺者数が増加している。その明確な理由はわかっていないが、本書を読んだ後ではこの事象が集団コミュニティからの悲鳴のように感じられてならない。本書は、精神科医の役割として症状の背後にある「声なき叫び」に気づき、医学の枠組みを超えて他者と社会に向き合うことの意義を再認識させられる一冊である。

(國井泰人)